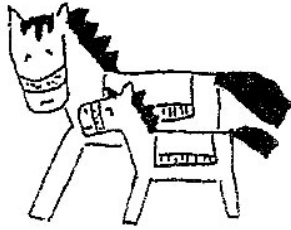


お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



令和3年 11月 No.324

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<https://oumanooyako.com>

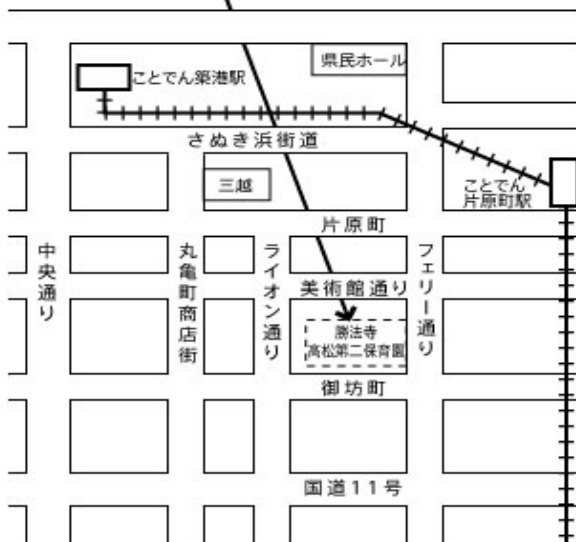


(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		11月の主な活動		～お気軽にどうぞ～	
11月	4日 18日	木	こうさぎおはなし会 15:30～16:30	低年齢のこどもたちも楽しみにしています。 どなたでもご参加ください。	
11月	6日 27日	土	体験保育 10:00～12:00	コロナもおさまりつつあるようです。 みんなと一緒にあそびませんか？	
11月	12日 26日	金	うたうたい「カラヴィンカ」 19:00～20:30	We Are The World 「つなぐうた」を 日本語版で練習しています。	
11月	19日	金	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	香川県の作家・村山 ^{かずこ} 壽子さんの童話を みんなで楽しみましょう。	
11月	20日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	乳幼児がよろこぶのびのびペーパーサート 「いもむしくん」を制作します。 (材料準備のため、11/15までにお申し込み下さい)	

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して いますので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)	育児相談(月～土)9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活 入園・見学についての相談もどうぞ。
--	--

香川県高松市御坊町2-2
地域子育て支援センター



夢お大海海硝
み星ぞの越子
てにらあえの
た。な。の。な。て
っ。た。の。の
た。の

硝子(がらす)のびんで
お菓子屋の
春の田舎の
お菓子の
硝子(がらす)

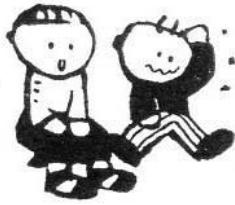
夢金
み平
て糖
た。は

金平糖(こんぺいとう)の夢

金子みすゞ童話全集④
「空のかあさま・下」より



☆今月の内容 — 「身体感覚を取り戻す」



身体感覚を取り戻す

倫理文化研究センター 丸山 貴彦

皆さんは、目頭が熱くなったり、胸が踊ったり、あるいは腸が煮えくり返ったりといった経験をされたことはありますか？

今回取り上げる「からだことば」とは、上記のような「目頭」「胸」「腸」など、主に、身体の部位の名称を含んだ用語（熟語や慣用句など）のことをいいます。ちなみに、「目頭が熱くなる」とは、目頭をこすり過ぎて熱さを感じることはありません。「胸が躍る」も、ダンスをして胸を激しく動かすことではありません。「腸が煮えくり返る」については、文字通りに解釈してしまったらそれはまるでホラー映画です。

周知の通り、「目頭が熱くなる」とは感動して涙が出そうになることを、「胸が躍る」は期待や興奮で心が弾むとことを、そして「腸が煮えくり返る」は抑えることができないほどの激しい怒りや憤りを感じることを意味します。つまり、それらは単に身体の部位の生理的あるいは物理的状态を表しているのではなく、心理的状态（気分や感情）と感覚とがセットになって表現されたことばなのです。

日本語にはこうした「からだことば」というものがとてもたくさんあります。たとえば、融通がきかず変化に対応できない人は「頭が固い」、相手の名誉を傷つけ恥をかかせてしまった場合は「顔に泥をぬる」（美容パックの一種ではありません）、人を馬鹿にしたような冷たい対応をとるのは「鼻であしらう」、自分の欠点や過ちを指摘されて聞くのが辛い時は「耳が痛い」（耳鼻科に行く必要はありません）、世間に対して面目が立たない状態は「肩身が狭い」、長い時間歩いたり立ち続けたりして足の筋肉がこわばると「足が棒になる」など、心身のつながりを感じられるような面白い表現が様々にあることがわかります。

しかしながら、こうした「からだことば」も、現代においてはその多くが死語になりつつあると言われています。特に、子どもや若者たちの間では、そのようなことばが日常的に使用されることはほとんどなくなりました。

要するに、ことばから身体が消失してしまったのです。ことばから身体が消えたということは、それに伴って身体に対する意識や感受性、すなわち身体感

覚も希薄化していると言えるのかもしれませんが。実際、そのような指摘はこれまでもなされてきました。

たとえば、「怒る」という状態について、ある世代までの人たちは、それを「腹が立つ」や「頭にくる」と表現してきました。「腹が立つ」は怒りをお腹で、「頭にくる」は頭で感じて憤るのです。

しかし、その後の世代の子どもや若者は、それらの表現をあまり用いなくなりました。代わりに使用するようになったのが、「むかつく」です。「むかつく」とは「吐き気をもよおす」ことで、吐いてしまえば終わるし、呑み込めば消化できるような中途半端な状態を指します。そこには怒りを巧く処理できずにムカムカしている身体感覚がかりうじて存在していることがわかります。

ところが、さらにその後の世代の子どもや若者は、「むかつく」でもない表現を多用するようになります。それは、「うざい」です。「うざい」とは「うざったい」の省略形で、「鬱陶^{うつとう}しい」や「うるさい」、「邪魔」といった意味を持ちますが、先ほどの「むかつく」とは異なり、そこには身体感覚というものがまるでありません。つまり、「うざい」ということばの背後には、怒りという心理的状态を身体で受け止め、感じたり処理したりするのではなく、身体の前で弾き返してしまおうとする姿勢や構えがあると推察することができるのです。

もちろん、「うざい」という言葉を使う子どもや若者が、大人になってからもその言葉を使用するかどうかはわかりません。もしかすると、大人になるにしたがって、怒りをお腹で受け止められるような「懐の深さ」が備わってくるのかもしれませんが。しかし、使用されていることばから身体が消えつつあることは明らかなのです。

身体感覚というのは、個人的なものであるように思われがちですが、時代や社会によって異なります。どのような感覚が備わるかどうかは、私たちの生活の仕方と深く結び付いているからです。つまりは文化なのです。したがって、時代が変わり、生活の仕方が変われば、身体感覚も変化するのは至極当然のことと言えるわけです。

ただし、ことばから身体が消えつつあるように、もし私たちの身体感覚が本当に希薄化しているのであれば、それは大きな問題と言えるのではないのでしょうか。なぜなら、身体は私たちの認識の原点だからです。もちろん私は、「からだことば」を使用していた過去の人たちの身体感覚が正しくて、使用しなく



なった現代人のそれが間違っていると主張したいわけではありません。身体と心のつながりや、それらの結びつきによって生起する身体感覚の様々を敏感に感じとることは、自らの存在やいのちを尊ぶことの出発点であるように思えてならないのです。

日本語の「からだことば」は、私にとって身体感覚を深く味わい直すための一つの方法であり、先人が残してくれた貴重な財産であるような気がしています。

「新世」2020年12月



性暴力から守る教育 文部科学省モデル授業 秋開始

子どもを性暴力の被害者や加害者にしないため、文部科学省が今年度から実施するモデル事業「^{いのち}生命の安全教育」に10以上の自治体から導入の申し込みが寄せられ、秋から各地で授業が始まる見通しだ。わいせつ教員問題で関心が高まっている側面もあり、有識者は「これを機に、国内ではおろそかにされてきた『性教育』に取り組んでもらいたい」とする。

文科省では、今年度から「学校における生命の安全教育推進事業」を始め、2023年度からの全国展開を目指し、モデル授業の実施校を募集。これまでに、さいたま市や大阪市など10以上の自治体から申し込みがあり、実施を前提に準備を進めている。

大阪市では、秋から小中学校の各2校で授業を始める予定で、同市教育委員会は「市内の小中学校では独自の『性・生教育』に力を入れてきた。その考えと、今回の国の方向性が合致した」とする。

教材は年代別で、①幼児期②小学校の低・中学年③高学年④中学⑤高校⑥主に大学の6種類。幼児や小学生向けでは、「水着で隠れる部分（プライベートゾーン）」は他人に見せたり触られたりしてはいけないことなどを、イラストを多用して解説している。保健体育や道徳、特別活動などでの活用が想定されている。

「切抜き速報 保育と幼児教育版」2021年11月

